

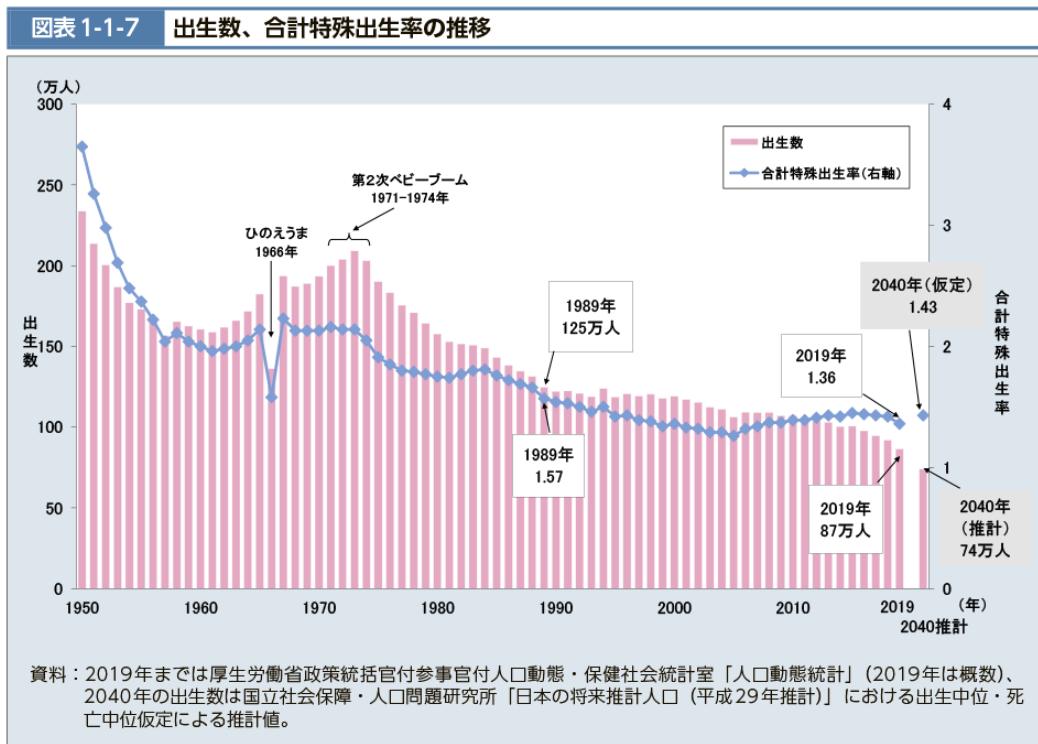
発達検査と対人援助学

⑯ 不確実さと不安の高まり

大谷多加志

先日、2024年1月から3月の出生数の速報値が出され、前年比で11673人減少して170804人（前年比6.4%減）であったことが発表されました。単純計算ですが、このペースだと年間出生数が70万人に届かない可能性があり、少子化が想定を超えるペースで加速度的に進行していることが明らかとなりました。下の図は厚生労働省のホームページに掲載されている出生数の推移のグラフです。驚くべきことに2040年の推計出生数は

74万人と想定されています。現状は数年前の状況認識よりも急激に悪化していると言わざるを得ないでしょう。大学での授業で、保育系の科目を担当していて、「家族」や「結婚」などをテーマに話す回があるのですが、その回の感想として、予想以上に多くの学生が「私は結婚するつもりも、子どもを産むつもりもありませんが…」と書いていることに衝撃を受けました。



厚生労働省（2024）令和2年版厚生労働白書

昭和生まれの私たちの世代でも、20代前半の頃はまだ家族を持つことも、子どもを持つこともまったく現実味がなく、「イメージが湧かない」という感覚はあったと思います。ですが、現代の若者はもっと明確な意思を持って「持たない」と言っているのだと感じました。

保護者の不安の高まり

長年、細々とですが子育て中のご家族と関わってきて感じているのは、年々子育て中の保護者の不安が高まってきているということです。これを裏返して考えてみれば、現代社会においては子どもを持つことに大きな不安や抵抗を感じる状況となっており、これも少子化の大きな背景要因なのではないかと思っています。

運動発達の遅れや言葉の遅れなど、具体的に発達面に心配な状態があつて、それを不安に思っておられるというケースももちろんあるのですが、それ以上に、どういう風に寝かしつけたらいいか、離乳食はいつからがいいか、どんな風に遊んであげたらいいか…など、ご心配ごとの種類と程度は想像以上に多様です。関わりのある幼稚園の先生が半分は笑い話、半分は深刻さを持ってお話くださったのが、保護者の方から「うちの子、青いおしっこが出ないんですけど…」と相談されたというエピソードでした。テレビで流れるオムツのCMでは、吸収力のすごさを示すためにオムツに液体をかけて吸収させるという映像を流します。この時にかかる液体は、たいてい青色です。おそらく、CM的にはあまりリアルな色にすると不快感を覚える方がいるだろう、という配慮なのだと思うのですが、どうやらこの

保護者の方はCMの映像から「赤ちゃんのおしっこは青らしい」と思ってしまったようです。“そんな勘違いをする人はまれなのだから、その人の問題だろう”と言ってしまうと、それは間違いではないのかもしれませんが。一方で、これは今という時代を象徴しているようにも感じられます。つまり、情報だけはあふれかえり、意識しなくても流れ込んでくる状況の中、何が正しく、何が有用な情報なのかの判別が困難なのは、子育て中の方に限らず、どの世代の人にも起こっているのではないかということです。一見して陰謀論とわかるものから、ディープフェイクのように説明されてもウソと見抜くことが難しいようなもので、情報はあふれかえっていますし、それぞれ信じる人もいれば信じない人もいるというのが現在です。そんなわけで、次に挙げる「遊び」に関するお話も、最初は「何が正しいか」ということが焦点になるお話のかな、と思っていました。

どんな遊びをするのがいいですか？

時々ですが、『どんな遊びをするのがいいですか？』『どんな風に遊んであげたらいいですか？』と質問されることがあります。保護者さんからのご質問である場合もありますし、子どもと関わる専門職の方からである場合もあります。たかだか遊びのこと…と思う人もいるかもしれませんが、保護者さんによっては、“遊んであげたいけど全然楽しい気持ちになれない”と気持ちがついていけないことに罪悪感を覚えておられる場合もあり、相談のトーンは相応に深刻です。

当初はHow to的発想、つまり“正しい遊び方”があるという意識なのかなと思ったり、あるいは時間を割くからには成果を挙

げたいというタイパ・コスパミたいな発想があるのかなと思ったりして、実際そういう感じの人もいたのですが、相談される表情やトーンから、もっと根深い不安や悲壮感のようなものが感じられました。

今も昔も、子育て中の親が子どもの成長を願うのはある意味自然なことで、数十年も前であれば「受験戦争」などという言葉も普通に使われていました。今の保護者から感じるのは、そういう「競争を勝ち抜くため」とか「学歴やスキルを身につけさせるため」などとは少し違うものです。「競争」や「学歴」を前提とした願いは、まだそれらに「意味」や「価値」があると信じているからこそ成り立ちますが、良くも悪くも、そのような確かさは失われているように思います。紛争や災害などが世界各地で多発し、不確実性が増加し、明るい見通しが持ちにくい時代の中で、“少しでも子どものために何かしたい”、“せめて子どもに何かひとつでも持たせてあげたい”という親の切実な思いがあるように感じられます。

不確実な時代の中で

もちろん、これまでももっと不確実性が高い時代はあったと思います。一方で、経済的豊かさの追求や技術の進歩が、必ずしも人々の幸せにつながらず、発展を遂げた社会が、長期的な人口減と衰退のサイクルに入ることが明らかとなった現代社会の中で、信じるものを失われ不確実性が高まっていることは、ある種の絶望に似た不安を人々の中に喚起しているように感じます。

では、このように不確実性が高まった社会の中で、子どもたちに育んでおきたい力とは何でしょうか。質問されたとすれば、今

の私は「好奇心」と「人とつながる力」を挙げると思います。10年後、20年後の社会が見通せないとすれば、“将来的に役に立ちそうな何かを先に授けておく”と考えるのは、基本的に無理がありそうです。そうであるならば、未知を怖がるだけでなく、未知を楽しむ心を子どもの中に育みたいですし、一人で行き詰らずに誰かとつながって進んでいける選択肢も自分の中に持っておいてほしいと思います。

では、そのために大人には何ができるのでしょうか。確かな答えかはわかりませんが、少なくとも大人自身も好奇心を持って、人とつながる姿を子どもに見せておくことは大事なかなと思っています。「現実的には…」「どうせ結局は…」としかつぶやかない大人から、何かを学ぼうと思ったり、未来への希望を感じることは少ないでしょう。新しいものに触れたり、学んだりすることが少し億劫に感じられるようになってきた中年期。少し意識して、新しいものへの拒否感を保留してみたり、自分なりに関わってみる機会を持つようにしないといけないなと自戒しています。



※CoPilot で生成した AI イラストです。

秋の京都での対人援助学会の賑わいを願って！